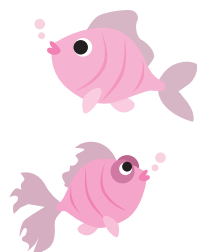


金魚すくい

はまだけい



夜になっても、夏祭りの神社はまだ混み合っていた。

「あら？ あなた、ザリガニの子？」

リコはびつくりして立ち止まった。

ザリガニの子？ なに、それ？

目の前にいるのは、ゆかたを着たおばさん。おばあちゃんよりは、ちょっと若そう。

「あのザリガニ、どうしたの？」

それで思い出した。三日月池で会った人だ。

二年生になってすぐの授業で釣ったザリガニ、リコには世話が難しく、三日月池に放そうとしていた。

「ごめんね、バイバイ」

リコが、ザリガニを池に入れようとしたときだ。

「ちょっと、待った！」

リコを止めたのが、このおばさんだ。

「マこのザリガニじゃないね。入れちゃだめ」

おばさんは、首を振って言った。

「ちゃんと元いたところに返さなきゃ」

あのときはTシャツにジーンパンだったけれど、今日はきちっとゆかたで、かみの毛もおだんごになっている。

「返しました。月原の沢に」

「それはよかった。あら、きょうは金魚なのね」

おばさんは、リコのゆかたを見ていた。赤い大きな金魚が、ゆったり泳いでいる柄だ。

「金魚、かわいいわよね」

そういうおばさんのゆかたも、小さな金魚がすそのほ

うで何匹も泳いでいる柄だ。

「金魚すくいするの？」

リコは首を横に振った。

「ううん、やらない。かえないから」

「そう」

にっこりしたおばさんは、びつくりするくらい、やさしい顔になった。

「金魚が好きなら、三日月池に来るといいよ、いっぱいいるから」

「おばさんは？」

「あたしは、金魚をすくいに来たの」

にいつと笑って手を振ると、おばさんはゆらゆらと人波をすりぬけて行った。

「リコ、買ってきたわよ」

りんごあめを買いに行っていたママが、戻ってきた。お祭りでしか食べられない、特別な味だ。わたあめにかきこりも食べて、ヨーヨーつりもまと当てもやった。

いつの間にか人の流れにすぎまがあいてきて、お祭りもそろそろ終わらしい。どこの屋台も、少しずつ片付け始めているみたいだ。

気がつく、金魚すくいの屋台の前に、三日月池のお

ばさんがいる。

「じゃあ、お客さんで最後だよ」

「ありがとうね」

おばさんは、ひらひらしたゆかたのそでをひもでまて、やる気満々だ。

「ボウルで受けるのは、金魚がちゃんと水から出てからだよ」

屋台のおじさんが答えている。

おばさんはぐいっと肩を回して、金魚のプールのそばにかがんだ。

「行くよ」

ヒューッと風を切って、ポイがふり下ろされた。水し

ぶきがあがる。

思ったとおりだ。

「あら、がんねん」

おばさんはくやしそうに、穴の空いたポイを、屋台のおじさんに渡した。

「おつかれさま」

おじさんは、一匹だけ金魚の入った袋をおばさんに差し出した。

受け取って振り返ったおばさんは、リコに気がついた。

「あら、金魚ちゃん」

屋台から離れて、リコはおばさんに言ってみた。

「もつとそつとやらなきゃ、すくえないよ」

「すくえなかったと思う？」

おばさんは、ニーツと笑って、金魚すくいの屋台をふり返った。

屋台のおじさんは、プールをのぞいたり、プールのそばにひざをついたりしている。なにか探しているみたいだ。でも見つからなかったみたいで、立ち上がったおじさんは、何度も首をかしげている。しまいには、プールを持ち上げて、排水溝に水を流し始めた。

「金魚、流しちゃう！」

リコは声を上げた。

「大丈夫、あのプールに金魚はいないよ」

屋台に背中を向けて、おばさんは言った。

「残った金魚に、幸せな未来はないからね。あたしがす

くだしてあげているのさ」

おばさんは、にこつとわらった。

「生まれたところに返してあげられればいいけど、そうもできないからね。せめて、できるかぎりいいところに連れて行ってあげたいよね。生きているんだから」

手を振って帰っていくおばさんの、ゆかたのそでがゆれる。すそのほうで泳いでいる金魚が、さっきよりたくさんになっている気がして、リコは何度も見なおした。